

筑紫大宰栗隈王

天武天皇元年（672年）、壬申の乱が起こります。この事件は、周知のごとく天智天皇の皇太子であった大友皇子と天智天皇の同母弟大海人皇子の皇位継承をめぐる争いであり、日本古代最大の内乱といわれています。当時、筑紫大宰として筑紫に在任していたのが栗隈王でした。また吉備には当麻広島がいました。この二人は大海人皇子に通じる

人物と目されており、これに懸念を抱いた大友皇子は佐伯男を筑紫に、樟磐手を吉備にそれぞれ派遣して、この二人に兵力動員の要請をします。その時も、両者に近江朝廷に背く意思があるようならば、殺害せよとも命じていた、と『日本書紀』は伝えていきます。

ここで栗隈王は、「筑紫国は、元より辺賊の難を成る。其れ城を峻くし隍を深くして、海に臨みて守るは、あに内賊の為ならんや」として、近江朝廷の動員要請を拒否します。つまり、筑紫の兵力は辺賊、すなわち外敵の侵入を防ぐことにあり、内乱を制圧するためにあるのではない、というのです。ここに「城を峻くし隍を深くし、海に臨みて守る」とあるのは、天智天皇3年（664年）に築かれた水城

太宰府人物志

資料室だより ⑤2

や、翌年築造の大野城・椽城のことを指すのではないかと思われまます。いずれにしても、このことは当該期の筑紫における兵力動員や山城・水城の管理などに筑紫大宰が深く関与していたことを示すものでしょう。そして、これらがのちに大宰府に与えられた軍事的機能の淵源になったと考えられています。

日本書紀によれば、当麻広島は、欺かれて帯刀を解いた隙に、磐手によって殺害されてしまったとあります。一方の栗隈王も、近江朝廷の動員要請を拒否したのですから、反意ありとされてもしかたありません。佐伯男は王を殺そうとしますが、三野王と武家王という王の二人の息子が帯剣して、側を固めており、男はかえって身の危険を感じて、事を遂げず

にそのまま空しく帰って行きました。

天武天皇4年、栗隈王は兵政長官に任命されました。兵政官は律令制下の兵部省に相当する部署で、その指揮下に天武朝の軍事政策が行われていったのでしよう。王が軍政に長けていたことが想像できます。

市史資料室 重松敏彦